展示解説（前期）

展示室で掲出している解説文です。改行やルビ、挿入写真・図面、重複する文言などは省略しています。作品解説は、出品目録番号を付けています。解説のない作品もあります。

出品目録番号 1～22 は美術工芸ならびに歴史資料、23～42 は考古資料のため、解説を分けています。

出品目録番号 1～22(美術工芸ならびに歴史資料)

解説パネル

黒木書院の障壁画

黒木書院は、本丸御殿の最も奥に位置する、2 室の座敷を設けるのみの小規模な書院です。室内の障壁画には、水墨を基調とする古様な「山水図」や「四季耕作図」が描かれています。障壁画では、金地に着色の装飾的な画面よりも水墨の方が格式高く、また山水図が最も格の高い画題であったことから、奥向きの空間にふさわしいとみなされ、これらの障壁画が描かれたのでしょう。しかし、黒木書院の障壁画を観察すると、絵や場面がつながらない部分があることに気づきます。尾張藩士・奥村得義（1793～1862）が編集した『金城温古録』には、黒木書院は清須城から移築した建物であるという伝承が記されます。この伝承に確証はありませんが、画面がつながらない障壁画の現状からすると、もとは別の建物にはまっていた障壁画を改変して黒木書院に移した可能性は高いと言えます。なお、黒木書院の障壁画の筆者は明らかになっていません。名古屋城本丸御殿の障壁画を描いたのは幕府御用絵師・狩野派ですが、黒木書院の障壁画は、素朴な筆致からして狩野派正系の絵師によるものと思われません。その一方で、江戸時代後半から近代の鑑定では、室町時代の御用絵師の名が挙げられています。古い様式で描かれた黒木書院の障壁画は、後世の人々に権威あるものと考えられていたことがわかります。

中国の絵画に学ぶ

黒木書院室内の障壁画には、いずれも中国絵画に由来する画題が描かれています。一之間「山水図」（出品番号 1・前期展示）に描かれるような山水風景は、神仙世界の表現であり、文人が隠棲することを望む場所でした。この風景を表現するため、山、流水、岩、樹木など自然の景物を構図の基盤として、そこに暮らす人、楼閣や草庵、橋などが主に描かれます。水墨画は 8 世紀後半頃、中国・唐時代に始まり、日本には鎌倉時代後期に本格的に伝わったとされます。水墨山水図の様式は時代によって様々ですが、墨と筆を自在に扱い、憧憬の景色を描いてきました。二之間「四季耕作図」（出品番号 2・4・後期展示）には、農民が農業に勤しむ様子が描かれます。耕作図という画題は、山水に次いで格の高い人物画に分類されます。町や農村、そこで暮らす人々を描いた絵は、政治を行う者に農業や民の苦労を理解させるという戒の意図がありました。耕作図の図様は、室町時代 15 世紀頃、足利将軍家が収集した中国絵画に由来します。黒木書院「四季耕作図」の一部図像や、人物の衣の輪郭線を

力強く引くところに、典拠となった中国絵画やそれを学んだ狩野派作品の影響がうかがえます。

上洛殿の天井画

寛永 11 年（1634）、江戸幕府 3 代将軍・徳川家光（1604～51）の上洛に際し、本丸御殿は増改築されました。上洛殿は、幕府御用絵師・狩野探幽（1602～74）による襖絵に加え、釘隠しなどの装飾金具、彫刻欄間などで飾られ、慶長 19 年（1614）本丸御殿造営時の室内に比べていっそう豪華な室礼の建物でした。そのなかでも、造営時の建物と上洛殿の大きな違いは、天井画をはめたことです。上洛殿三之間以上の 4 室と入側にはめ込まれていた天井画は、650 面が現存します。これらの天井画は、面ごとに山水、人物、花鳥が描き分けられます。上洛殿で最も格の高い上段之間は、天井画 102 面のうち半数以上が水墨山水を主題とし、俗世から離れた山水風景を描きます。しかし、水墨山水の天井画は、一之間では 96 面中 30 面、二之間では 83 面中わずか 4 面と、下位の部屋ほどその数は減っています。さらに、上段之間は二重折り上げ格天井、一之間は折り上げ格天井という、格式高い部屋に用いられる建築構造が採用され、折り上げの湾曲した部分にも天井画がはめられていました。時の将軍を迎えるため権威ある空間に仕立てた天井画から、水墨で描かれた作品を紹介します。

作品解説

1　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　黒木書院一之間東側襖絵「山水図」
江戸時代初期 17世紀　名古屋城総合事務所蔵

高くそびえる山とその麓の樹木や小屋が描かれています。主となるモチーフを前後に重ねて奥行きを出し、横へ広がる山脈と水景によって広大な景色を描き出します。水辺の小屋では人物がくつろいでおり、人里の喧騒から離れ、静かでゆったりとした時間の流れが感じられます。

「山水図」右から２面目: 小屋の中には、肘をついてくつろぐ男と小屋の外を眺める童子がいます。このような細部も、墨の濃淡を変化させて描かれます。また、樹木の葉も墨の階調を変えつつ、丹念な点描で表されています。広大な風景と細部の丁寧な描写が魅力の作品です。

3　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　黒木書院二之間南入側襖絵「雪中柳鷺図」
江戸時代初期 17世紀　名古屋城総合事務所蔵

白鷺（小鷺）が飛ぶ雪景色を描いている4面の襖絵です。本図は画面下部の地形の線がつながっていません。また、画面右の1面のみ、芦の葉を緑で着色していた跡や金の線が残っているため、もとは他3面と異なる場面であったことがわかります。

「雪中柳鷺図」芦の描き方

右から１面目:　輪郭線の内側は緑で着色され、金の線で葉脈が描かれていました。

右から３面目:　墨だけで芦を描きます。雪も着色せず、紙の地色で白さを表します。

5　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　鷺之廊下北側杉戸絵「滝図」　江戸時代　寛永11年(1634)　名古屋城総合事務所蔵

垂直に落下して飛沫を上げる滝が迫力のある杉戸絵です。本図は着色画ですが、滝のうねるような輪郭線や岩の表面の鋭い筆線など、水墨の描法も見どころです。ただし、一部には後の時代に引き直された墨線も確認されます。

9　名古屋城ガラス乾板写真　「黒木書院一之間(焼失)西側」　昭和 15～16 年(1940～41)頃　名古屋城総合事務所蔵

黒木書院一之間の室内は書院造で、大床の壁貼付絵にも山水図が描かれていました。画面右側に描かれた景物は打ち込みの強い墨線で象られ、険しい岩肌は斧劈皴という鋭く勢いのある筆致で表されます。

10　名古屋城ガラス乾板写真　「黒木書院二之間より一之間(焼失) 西北側を望む」　昭和 15～16 年(1940～41)頃　名古屋城総合事務所蔵

二之間「四季耕作図〔刈入〕」（出品番号２・後期展示）が描かれた襖を開けると一之間へ続きます。この裏面には「山水図」　（出品番号１・前期展示）が描かれています。

11　名古屋城ガラス乾板写真　「黒木書院二之間(焼失) 東北側」　昭和 15～16 年(1940～41)頃　名古屋城総合事務所蔵

黒木書院二之間の室内、「四季耕作図〔田植〕」（出品番号４・後期展示）の左に続く襖絵と壁貼付絵を写します。日本で描かれた四季耕作図は、室町時代、足利将軍家が収集した中国絵画を模して制作されたことに始まります。正面に写る親子が橋を渡る図は、室町時代から描き継がれる図のひとつです。

12　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　上洛殿入側天井画「菊文図」　江戸時代　寛永 11 年(1634)　名古屋城総合事務所蔵

上洛殿入側（廊下）の天井には、緑と白の「桐文図」と「菊文図」が交互に並んでいました。「菊文図」は周囲に花菱文をめぐらせ、中央に大きく菊文を描きます。菊文の周りに金砂子を蒔き、菊の蕊も金で着色した豪華な天井画です。

15　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　上洛殿上段之間「楼閣山水図」　江戸時代　寛永 11 年(1634)　名古屋城総合事務所蔵

板を湾曲させて折り上げ部分にはめられた天井画です。手前の岩陰から橋が架かり、その橋を渡ると小屋や楼閣があり、さらにその奥には山がそびえます。前後に重ねたモチーフの大小関係や墨の濃淡を変化させることにより、遠近感を明快に表しています。

16　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　上洛殿一之間「山水図」　江戸時代　寛永 11 年(1634)　名古屋城総合事務所蔵

画面右側にモチーフを集中させ、左側に洲浜が広がり、水辺の景色が展開します。突き出る岩を太く濃い墨線で立体的に描き、懸崖に沿う道の先に高楼と小屋が並びます。このような図の構成は碗の絵付け（出品番号 23 以降）とも共通しています。

17　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　上洛殿一之間「茄子図」　江戸時代 寛永 11 年(1634)　名古屋城総合事務所蔵

丸々と実った茄子が描かれます。淡墨で輪郭をとるもの、墨の濃淡のみで形を表すものがあり、異なる描法を楽しめます。身近な野菜や果物を描いた絵画は「蔬果図」といいます。長寿や子孫繁栄などの吉祥性、また仏教思想のもと鑑賞されました。

18　国指定重要文化財　名古屋城本丸御殿障壁画　上洛殿上段之間「山水図」　江戸時代 寛永 11 年(1634)　名古屋城総合事務所蔵

建物の中にある障壁画や天井画は自然光にさらされやすく、紙が剥がれ、変退色しやすくなります。本図にも欠損部分がありますが、画面中央の岩、その下の流水線から、山水風景を描いていたとわかります。

出品目録番号 23～42(考古資料)

解説パネル

城下の人々から見た山水図

本丸御殿障壁画はその名の通り本丸御殿にあり、名古屋城下に住む町人やまたほとんどの武士でさえ、御殿の襖や天井に描かれた山水図を見ることはできませんでした。しかし位の高い家臣や有力な商人であれば、山水図を所有し、鑑賞していたと考えられます。では、城下に暮らす多くの人々は山水図に触れる機会があったのでしょうか？山水図は寺院の襖絵などにも見られ、御開帳や法事など行事の折りに見ていたと考えられます。他にも、城下の人々は非常に身近なところで山水図に触れていました。それは食器です。山水を描いた食器や、水墨画に似た手法で風景を描いた食器を日常生活の中で使用し、生活に彩を添えていました。これらの食器は日用使いの量産品であるため、御殿の山水図と求められる品質や技術が全く異なりますが、風景を楽しむという共通の目的のもとで描かれた“絵”であることに違いありません。将軍や藩主が楽しんだ絵と城下の人々が楽しんだ絵をこの機会に見比べてみてください。

京焼風陶器と山水図

京焼風陶器の中でも水墨画と似ている点が多い楼閣山水文が描かれた陶器に焦点を当ててきました。京焼風陶器は城下の隅々から出土していることから、城下に住む人々であれば手が届く量産品であったと考えられます。江戸時代中後期に京焼風陶器は流行し、作り手は短期間に大量に生産する必要に迫られます。陶工は生産の効率化を進めます。量産の過程で山水図の形骸化、簡略化も進み、展示資料のような「楼閣山水文」と呼ばれる文様が誕生しました。こうした山水図が描かれた京焼風陶器の流行とそれに伴う大量流通は名古屋城下の

みならず、全国に広がります。人々が生活の中で必ず使用する食器の絵柄に山水図が選ばれ、大量に生産され、消費されたことは江戸時代に多くの人々が山水図に触れていたことを示すと考えられます。京焼風陶器以外にも山水をモチーフにした陶磁器はいくつもありますが、京焼風陶器は江戸時代における山水図の広がりの一端を担っていたと言えます。

名古屋城と城下町から出土した楼閣山水文 京焼風陶器

本展示では名古屋城二之丸庭園、名古屋城三之丸、白川公園遺跡から出土した遺物を紹介しましたが、この他の地点からも楼閣山水文の京焼風陶器が出土しています。右の図では現在の地形図に「名古屋図面」(中央ケース)の描画範囲(桃色枠)と名古屋城範囲(赤色枠)を示しました。楼閣山水文京焼風陶器が出土した場所を①～⑧に示しました。城下町のほぼ全域で確認できることがわかります。出土地は主に武家地と町人地です。武家地では家老のような上級武士だけでなく、中～下級武士の居住地域からも確認しています。

①名勝名古屋城二之丸庭園 城内 藩主の居所 ②名古屋城三の丸遺跡 城内 藩主親族屋形、上級武士の居住地 ③白川公園遺跡 城下町 中～下級武士の居住地 ④竪三蔵遺跡 城下町 中～下級武士の居住地、町人地 ⑤旧紫川遺跡 城下町 中～下級武士の居住地、町人地 ⑥尾張元興寺跡 城下町(郊外) 町人地 ⑦小鳥町遺跡 城下町 町人地 ⑧幅下遺跡 城下町 中～下級武士の居住地、町人地

名古屋城三の丸遺跡(御屋形)出土遺物

この場所は名古屋城築城時から慶安 4 年(1651)までは上級藩士の屋敷、それ以降は藩主の親族が居住する御屋形と呼ばれる屋敷が広がっていました。発掘調査では遺物としては出品番号 27 や 28 のような陶器の碗をはじめとする量の日用品が出土し、遺構としては御屋形の庭園を構成する池を中心に複数の建物跡、溝、井戸などが確認されています。御屋形には藩主の親族のほかに、女中や屋敷や庭園を管理する人など様々な人々が居住していました。出品番号 27 や 28 を含めた発掘調査で出土した日用品の大半はこうした藩主一族に仕える人々が使用していたと考えられます。

名古屋城三の丸遺跡(武家屋敷)出土遺物

この場所は江戸時代を通じて武家屋敷がありました。居住者は時期によって異なりますが、居住者の家格としては番頭や家老で、いわゆる上級家臣が屋敷地を拝領していました。発掘調査では屋敷境、建物跡、井戸などを確認しました。また、屋敷の表(玄関前の空間)と(庭や土地境界付近)に複数の廃棄土坑(ゴミ捨て穴)が集中していたことがわかりました。出品番号 30 ・31 ・32 は屋敷表の廃棄土坑から、29 は屋敷表の井戸の中から出土しました。

名古屋城二之丸庭園 南池 出土遺物

二之丸庭園は二之丸御殿に付随する庭園です。元和 4 年(1618)に造営されて以降、明治 4 年(1871)まで尾張藩主によって拡張や改修が続けられました。明治 4 年以降は二之丸全体を陸軍が所有しており、南池などの一部は解体されましたが、一部は陸軍によって保存と改修が行われました。発掘調査で検出した庭園遺構が尾張藩か、陸軍による作庭なのか、明ら

かにできていない点もありますが、出土した遺物は様々な研究によって、製作時期や使用者が明らかにされています。出品番号 23～26 は家臣や女中など藩主に仕える人々が使っていたと考えられ、碗に描かれた山水図は二之丸で働いていた人々にとってなじみ深いものだったのではないでしょうか。

白川公園遺跡(名古屋城下町)出土遺物

この場所は名古屋城から続く武家屋敷の最南端と寺地の境界に位置します。すなわち名古屋城から離れたところに位置する武家屋敷で、二之丸や三之丸に居住する武士と比較して低い位の人々が多く暮らしていました。出品番号 33 は 17 世紀中葉～後葉の遺物を多く含む溝から、出品番号 34 と 35 は近代の土管周辺から出土しました。どちらも出土した遺物をどのような人が、どのように使用していたのか、想定しにくい出土状況です。しかし城下町の中では郊外に近いこの場所から出品番号33～35が出土したという事実は城下町の隅々まで山水画を手本とした文様(楼閣山水文)が描かれた日用品が流通していたことを想起させます。

近代の楼閣山水文

出品番号 36 と 37 は明治時代に生産された染付です。京焼風陶器は江戸時代後期に入ると作られなくなりますが、楼閣山水を描いた碗や皿は近代以降も生産され、現代に至ります。明治時代の二之丸は陸軍施設が立ち並んでいました。陸軍の兵士たちにとっても山水図が身近であったことがわかります。

肥前と瀬戸の京焼風陶器

肥前では御経石窯、清源下窯などから、瀬戸では市左衛門窯、杢兵衛窯、かみた窯群などから楼閣山水文の碗が出土しています。肥前で作られた碗は、京都で作られた碗と同じく卵黄色に発色し、文様は楼閣、草花、山などが描かれています。一方で瀬戸で作られた碗は肥前産と比べると、文様が簡略化され、楼閣、草花、山などの図の判別が難しくなっています。瀬戸産は比較的粗く描かれていると言えます。こうした品質の差のせいか、名古屋の出土状況をみると尾張藩の政庁ともいえる二之丸からは現在のところ肥前産しか確認できておらず、三之丸や城下からは肥前産と瀬戸産の両方が出土する傾向にあります。

京焼風陶器とは

京焼と呼ばれる京都で作られた陶器と同じ色に仕上がるように作られた碗です。江戸時代中後期(17 世紀後葉～18 世紀中後葉)に制作されていました。碗の裏側に京都の清水を想起させる「清水」印が押される製品もありますが、実際には肥前や瀬戸など京都以外の地域でつくられています。京焼風という名に反して、京焼ではあまり使われない楼閣山水文を多用するため、京焼を忠実に写したわけではないようです。京焼風という呼称に疑問を持つ研究者も多くいますが、本展示では京焼風陶器とします。

楼閣山水と楼閣山水文

楼閣山水は山、川、建物(楼閣)を描いたことに由来し、モチーフや構図が水墨山水図と共通することから水墨画を手本としたのではないかと考えられます。呉須などによる単色の絵付けで、減筆という少ない筆致で図を描く手法も水墨画と共通します。絵は次第に形骸化していき、山、川、建物は記号化します。この形骸化の中で楼閣山水文が誕生しました。

瀬戸史料・全　鶴舞中央図書館蔵

名古屋市史編纂に伴い写された瀬戸の窯業に関する史料の一つです。江戸時代に流通していた碗の名称と図が記録されています。中でも「おむろ」と書かれた碗は京焼風楼閣山水文碗を指していると考えられ、当時の人々がどのように呼称していたのかを知ることができます。名古屋城で発掘調査をすると同じような碗が大量に出土します。ここでは名古屋城から出土した楼閣山水文碗をはじめ、文様や器形が共通する遺物を紹介します。